

ダンテ「神曲」における主語と 述語動詞の不一致について

古 浦 敏 生

主語と述語動詞との一致の問題は、イタリア語においても、シタクスのに面白い。一般に、主語と述語動詞は数と人称において一致するのであるが、多くのイタリア語文法書に述べられている如く、「文法的な一致の代りに、時には意味的な一致が行われる。例えば、主語が集合名詞の時には、文法的には単数である主語に対して複数の述語動詞が置かれる」とか、「もしも主語が人間ではなくて事物である時、それらの主語が同義語と考えられたり、一つの全体として考えられたりする時には、述語動詞は単数となる」のである。

さて、ラテン語からイタリア語に至る言語変遷を考える場合に、イタリア俗語の韻文の形式を確立したのがダンテ（1265～1321）の「神曲」であると云われるのであるが、その「神曲」における主語と述語動詞の一致に関しては、Enciclopedia Dantesca「ダンテ百科事典」、Rome, 1970 や、Hall, R. A. Jr.: Bibliografia della linguistica italiana「イタリア言語学文献集」、Firenze, 1958 を見ても、くわしいことが記されていない。

そこで、「神曲」全体（地獄篇、浄罪篇、天堂篇）において、主語と述語動詞の不一致の例をすべて抜き出し、分析してみた。結果は次のとおりである。

- (1) 「神曲」に現れる主語と述語動詞の不一致の例の数は、地獄篇から天堂篇へ行くにつれて増加している。
- (2) これらの不一致の例は、そのほとんどが、複数の主語に対して単数の述語動詞で受けているものである。
- (3) 単数の主語に対して複数の述語動詞で受ける場合には、主語が述語動詞に先行し、複数の主語に対して単数の述語動詞で受ける場合には、述語動詞が主語に先行する傾向がある。
- (4) 二つの主語がお互いに何らかの意味的なまとまりを示している場合には、述語動詞はしばしば単数で現れるのであるが、それと並んで、述語（動詞）が何らかの意味的なまとまり（同時性・統一性・均等性）を示している場合にも、述語動詞はしばしば単数で現れる傾向がある。